

高専、あるいは沼津高専、豊田高専、福井高専とありますが、この66というのは、日本的に見ても多分一番高いレベルでこれはありがたいことだと思っております。

ところが、実はこれは本校のある学科の学力入試の実情で、本来は公表しない方がよいのかもしれませんが。学力試験では、40人定員のところ20人の学生を募集いたします。半分は推薦で決まっておりますので、あと半分学力でとるということですが、画面を見ていただきますが、順位は上から1番、2番、これは学力試験の順位ですが、今48番まで合格としております。20人をとりたいのですが、ある学科では48人合格者を出しているということです。実は、応募に際しまして入学の意思というものを確認しております。アンケート形式でその生徒さんが、「A、必ず入学」「B、まだ決定していない」、もし受かっても入るかどうかわからないというように、A、Bを分けておりまして、画面の合格者についてA、Bを見ていただきますと、成績のいい方は全部がBとなっておりまして、後の方にAがつくという形で、この色塗りをした部分ですね。黄色い部分はAと書いて入学した者、それから緑の部分はBと書いて入学した生徒ですが、問題点としては、学力試験の合格者で高得点の生徒が入学意志が低いといったようなことがございますので、この辺をうまくしないと良い生徒が集まらないというふうに今見ているところです。ちょっと生々しいデータですが、これが現状であります。

さて、進路の状況ですけれども、本校には進路支援委員会というのがございまして、ここを中心に学生指導をしております。先ほどの校長の説明にもございましたが、学科の卒業生の就職・進学希望の比率というのは、半分半分ぐらいでした。昨今少し就職希望が増加するという傾向があります。就職の様子でありますけれども、まず本校ではいろんな対策がありまして、就職指導会と学科長による個別指導をしております。学内でも企業の方にお集まりいただいて、企業説明会をしております。いろいろな企業からも担当者が御訪問いただきますので、その方々からも説明をいただいたり、卒業生を呼んで就職指導会をしたり、細かい指導をしているつもりです。学生は、多くは企業へ推薦応募という形をとります。学科長から推薦書を書きまして企業に応募をさせていただくという形です。場合によっては、自由応募を並行する学生もおります。この推薦応募をした場合に、概ね3分の2程度の学生が1回の応募で内定をいただきます。2回受験をすると、ほとんどの学生がほぼ内定をいただきますが、中には1人で4回、5回、6回と稼いでしまう人がおりまして、平均すると概ね2回受ければ通るという状況です。

企業の採用担当の方にお伺いしますと、概ね自由応募の場合ですが、中堅企業の場合だと1万人の応募がありまして、その中で100人ぐらいを選んで面接をするということだそうです。面接をした結果、受かる学生というのはまた少なくなるわけですから、そのことから考えますと、高専の推薦応募による就職というのはいかに有利であるかがわかりだと思えます。

そして、大学への編入ですが、3年生、場合によっては2年生になります。実は編入試験というのが、それぞれの大学、場合によっては学部で設定をしているということで、日付が違うものですから、一般の高校から受ける場合とはかなり違いまして、複数の大学の受験が可能で概ね3校程度を受験します。場合によっては推薦制度というものがありまして、これも特殊の場合は書類だけで合格するといったような受験もあります。ここに学内成績と進路と書きましたが、成績のいい学生が大学に行って、悪い学生が就職するといったようなことはありません。成績のいい学生も就職しますし、悪い学生も編入をします。画面には書きませんでしたが、実は学業の成績がびりでも国立の大学に入れます。

さて、これは先ほどと重複するかもしれませんが、一般的な高校から工学系の大学へ行く場合の教育と鈴鹿高専の教育の違いということで、幾つか書いてみました。まず15歳からの高等教育、高等教育機関で15歳から勉強できるということは大きいことであると思います。大学受験に妨げられないシームレスなキャリア教育、あるいは実験、演習に支えられた実践力とか実現力の習得ができる。あと、創造性をかきたてるためのさまざまな取り組みにも特徴があります。あと学級担任制になっておりまして、これは高校ではもちろんのことかもしれませんが、大学ではまださほど対応していないと思います。これも後でもう少し詳しくお話しますが、教員の資質ということですが、高校ではおよそ学位を持った人は少ないと思いますが、本校では専門についてほとんど専門学位を持っておりますので、高等教育を受けることができると思います。それから、教育資源の学生1人当たりの占有率というふうに考えますと、いろいろ体育の施設から研究設備がありますが、5年生になりますと卒業研究というのをやります。大学の工学部や理学部でも同じように研究をするわけですが、そのときに教員1人当たり何人ぐらい学生がいるかということですが、本校では教員1人当たりにも多くても5人、6人まではいかないぐらいですので、1研究室数人の学生で研究ができるということで、教員の占有率、1人の学生が教員を何時間占有できるかということも、高専の有利な点だと思えます。

それから、現在は本校だけですが、1こま95分授業というのをしております。ほかの学校は90分であったり、場合によっては100分だったりしますが、これを30回受けますと2単位になります。大学では15回で2単位になりますので、高専では、1つの単位をとるために大学の2倍の授業時間を必要とするということになります。卒業には、本校では一般科目75単位、専門科目82単位以上、合計するとこれにはならないので、ちょっとプラスアルファをしないとイケないのですが、167単位以上をとらないと卒業できないということになっています。

参考にお阪大学の工学部の修了単位数を見ますと、卒業に必要な単位数は130から140ということになっていまして、これと比べますと、もちろんこちらは5年間、そちらは4年間ですので、その違いはもちろんありますが、先ほどの大学の単位の数え方が

半分ですので、実質は300単位ぐらいをしているというふうに考えていただくと、かなりしっかり勉強していると見ていただければありがたいと思います。

ついでに時間割を見ていただきますと、これは今年の後期の授業時間割、1年生、機械工学科、電気電子工学科とありますが、1限目から8限目までずうっと詰まって、ほとんど毎日ありまして、水曜日は半日というふうになります。5年生になりますと、ちょっとずつあいたところがありますけれども、卒業研究というのが入ってきます。

学科や専攻科の教育につきましては、昨今、質保証、あるいは認証評価、JABEEへの対応がありまして、教育目標を定めて教育をしております。簡単に申し上げますと、創造性豊かな実践的技術者を育てるとか、国際的に活躍できる実践的技術者を育てることを目標にしておりまして、これを実践するためには、達成度評価基準というのを作っております。少し細かい話になりますが、これは電子情報工学科の学習教育目標の達成度評価基準でして、学習教育目標として技術者としての姿勢であるとか、基礎、専門の知識とその応用力であるとか、コミュニケーション能力というのを培うことになっておりまして、例えば技術者としての姿勢ということで、視野、技術者倫理、意欲、基礎・専門のところでは、基礎とか専門とか展開、こういう教育目標を置き、この目標を実際に達成するためには、例えば卒業研究や創造工学の単位を習得するとか、何単位習得するとかいうことを具体的に定めております。

さて、先ほどの創造性の涵養を重要に考えておりますけれども、このためには具体的にどういうことをしているかということですが、先ほどこっと話が出ましたが、創造工学という教科があります。これは必修で、全学科で金曜日午後同時開講をしております。シラバスから抜き書きをしてきましたが、電子情報工学科のシラバスでは、専門の教科や、これに関連する周辺技術分野で開発、作成したいものや解決したいテーマを自分で設定して、その実現方法と時間を考えて、目的どおりに稼働するシステムや物を製作する、実際に作るということです。これは半年間ございまして、金曜日の午前4限を使いまして作ります。実際にできたものの写真があります。これは気球ですが、体育館の中で自由にぐるぐる回るとか、これは竖琴のようなものですが、小さいコンピューターで作動する、本当の竖琴ではなくて、にせの竖琴みたいなもので、弦を引くと音が出るものです。その他創造的プロジェクトというのがございます。簡単に言えばクラブのようなものですが、ロボットコンテストであるとか、プログラミングコンテストであるとか、ソーラーカーであるとか、エコカーであるとか、画面のようなものを作ったり、いろいろなコンテストに応募しています。ここにお見せするのは、プロコン、ロボコン、ソーラーカーのコンテストの模様です。

あと、知財の教育とか卒業研究、特別研究、これは専攻科で行うものですが、こういうことにも力を当然入れておりまして、これは卒業研究発表会の様子ですが、画面のように学会形式で発表をさせるということをしております。

国際性の涵養についてですが、実践的な語学教育、これはアメリカ人の常勤教員と非

常勤の外国人英語教員が担当しております。TOEICを活用するとか、先ほど校長の話もありましたが、留学生を受け入れる、海外インターシップを実施する、海外協定校というのがございまして、これと交流する、2年生では、マレーシアに海外研修をする。これはマレーシア研修旅行の写真です。それから、協定校との交流、写真は協定校のオハイオ州立大学です。写真は留学生との交流会です。マレーシアからの留学生はたくさんおります。本校の2年生は研修旅行でマレーシアを訪問し、次の年にマレーシアからの留学生をクラスに受け入れるということで交流を図っています。

16年から23年の留学生一覧も書いてあります。図中のMS、CSというのは、下にあります材料工学科とか、生物応用化学科ということで、1人、1人、1人、1人ということで、Mは機械、M2というのは2人来たということで、16年から23年、マレーシア、中国というところから、人数は多くはありませんが、毎年十数人ぐらいいるということです。

国際的なインターンシップというのがありまして、これは高専機構によるものですが、タイ、シンガポールに行っております。海外協定校は今3校ございまして、アメリカのオハイオ州立大学、カナダのジョージアンカレッジ、中国の常州信息職業技術学院がございまして、学生の交流や教員の交流を毎年行っております。

学生支援ということで、先ほどお話しいたしましたが、余り大学ではやられていないことだと思いますが、学科会議をそれぞれ開きまして、学生個別の進級の評価、彼は進級させていいかどうかとか、ちょっとどこの授業が足りないので補講したほうがいいとかということを、一々学科で話あっており、各教員にお願いしたり、学生のTAを活用して補講したりしております。

鈴鹿高専ヒューマン&テクノロジーネットワークという集まりがありまして、こういうところから講師を派遣いただいて、エンジニアリングデザイン教育をするとか、技術科学大学と連携をさせていただいて、共同研究や課外授業やインターンシップをさせていただいていたり、SUZUKA産学官交流会という組織がありまして、この場を借りて学生の研究発表会をしたりしております。あるいは競争的資金——これは多くは国からですが——を活用しまして、学生の教育や支援をしているということです。学生支援につきましては、これもちょっと重複しますが、担任制がございまして、個別に指導しているということ、それから学内での企業説明会、これは体育館で企業の方々を招いて合同説明会の実施の様子です。

競争的資金の話ですが、例えば画面のようなものがありまして、この経費でCATVの番組制作や鈴鹿高専の印刷局というのをつくったり、実験装置を用意したりしています。写真は取り組みで導入しました教室内画像提示装置で、各クラスに簡単なテレビのようなものがありまして、だれだれ君、どこどこへ来てくださいますといったようなメッセージを先生の部屋から指示できるようになっています。

大学改革推進等補助金というのがありまして、なかなか獲得するのは難しいですけれ

ども、5,000万円、4,000万円といったような大きい経費をいただいて、先ほどの教育なり、学生支援に使いました。

画面は、科研費の様子ですが、これは残念ながら余り誇るほどのものではございませんが、高専の中では中位ぐらいの成果を上げていると思います。最近の設備につきましても、写真のようなもの、数千万円ぐらいのものもいただいております。

先ほどの外部資金のところですが、文科省の委託事業、ものづくり技術者支援事業「エキスパートのスキルと感性を導入した創造工学プログラム」ということで、周辺のベテランの企業技術者の支援・指導のもと、学生の自主的な創造活動を支援するという取組も実施しました。

これは、平成20年度質の高い大学教育推進プログラム採択事業として、「環境志向かつ創造型エンジニアの育成」ということで、環境への配慮とか、環境問題というのをキーワードにして、エンジニアリングデザイン教育や卒業研究のテーマの創出ということをしてきたものです。

あと、これは先ほどの女子中高生の理系進路選択支援事業ということで、中学生や高校生の女子を対象に、具体的にはさまざまな理系の職業で働くたくさんの女性をお呼びして、講演会や職場訪問でお話をする機会を用意して、女子中高生に理科に関心を持っていただくということです。女子学生がこのページをつくりました。

あと、CATV局と連携した想像設計力発現の支援、これは学生支援GPというのがありまして、CATV番組づくりや印刷物による情報発信を手段とした想像力とやる気の発現支援ということで、これも数千万円のお金をいただいて実施しているものです。

あと、各科の教育について、これは重複しますので、これで終了させていただきたいと思います。ありがとうございました。

(江崎渉外担当主事)

高橋校長及び桑原副校長に、鈴鹿高専の現状あるいは取り組みなどの概略の話をしていただきました。続きまして意見交換に入ります前に、これまでの説明につきまして、何か御質問等がございましたらお受けしたいと思いますが、何か説明が足りないところ、あるいはもう少し聞いてみたいというようなことがございましたらご発言ください。よろしゅうございますでしょうか。

それでは、いろいろなお立場の委員の方に来ていただいております。最初に高橋校長からお聞きしたいことをリクエストさせていただきましたけれども、そういった観点からいろいろな御意見を賜りたいと思います。

もし御意見いただく場合は、挙手をお願いいたします。

(角田委員)

豊橋技術科学大学の角田といいます。先ほど校長先生からお話がありましたが、本学は、長岡技術科学大学とともに、高専の学生を主に受け入れる大学として、創られた大学です。

去年でやっと創設35周年ですから、他の大学に比べれば、まだ、ちょっと若い大学です。鈴鹿高専を卒業して本学に編入された学生の方が、その後、鈴鹿高専の教員として活躍し、我々の大学に学生を送り出しているという、非常に強い密接な関係を今後も続けていきたいと思っております。

先ほど話がありましたように、高専から始まった「ロボットコンテスト」ですが、いわゆる「大学ロボットコンテスト」というのがありまして、私たちの大学はNHKのほうでは結構名前が売れています。東京大学が打倒豊橋技術大学で一生懸命頑張っているという状況が放映されたかと思います。本学がこのように東京大学と比較される形で名前が出ているというのは、高専から編入された学生の方が、非常に技術が高くで優秀であると社会的に認知されてきているということでもありますので、鈴鹿高専から多数の学生の方に編入学いただけるということは非常に感謝しております。

最近、ものづくりを含む工学系学生に対しての評価が非常に高くなっており、そういった中で、工学系のリーダーを求める風潮がかなりあります。我々としても、それを踏まえる形でリーダー教育を進めているところです。リーダー教育を行うにあたっては、リーダーとはどうあるべきかということがあります。そこで、本学の学長は、現役の企業の社長、会長の方を講師として招へいし、学生に直接講義することにより、リーダーとしての資質、志等を肌で直接感じさせる教育を取り入れ進めております。

具体的には、トヨタ自動車から張会長、三菱ケミカルホールディングスから小林社長、新日本製鐵から三村会長等に来ていただいて、学生、教職員に対して講義をし、さらに講義終了後には、スーパーリーダー塾「トップと語る会」と称し、選ばれた学生と直接、対話をする形式で、教育を進めております。

いわゆる社会のトップの方と直接会う機会というのは、我々でさえもなかなかありませんが、このような形で、学生がそういう方と話をする機会を設けております。鈴鹿高専の学生の方も非常に優秀な学生さんが多いので、是非、そういうメンバーの一員になっていただければと期待をしているところでございます。

あともう1つですけれども、これまで工学系、理工系は男子学生が多かったところですが、現在、そして将来に向けて、この分野で活躍する女性が求められており、女子学生の入学、教育に力を入れてきているところです。

ところが、現状は、大学、高専もそうですが、トイレも含めてアメニティーの関係が、意外と男子中心の環境となっています。ソフトの提供は非常によくなっていますが、ハード面からすると、長く生活していくには、女子学生の側から見ると、つらいものがあるという現状があります。我々の大学としては、最初に取り組んだのが女子トイレ

レの増設、改修です。まずは、いわゆるパウダーボックスをつくったということと、あとはトイレの中に着替えができる台を入れ、女子学生が着替えをできるようにしました。女子学生は実験をする時には、普通の格好ではできないので、着替えをしなければなりません。そういうことも含めてハード面を変えていかないと、我々の大学に女子学生の方が来ていただけないと思い、取り組んだところです。高専のほうも、今の感じでいくと女子学生の占める割合は約25%ぐらいで、上昇傾向にあるかと思えますけれども、ハード面の充実性ということも含めて、お互い連携していけば、女子力を使って日本を動かせるという、理工系の女子のポテンシャルを高めていけるのではないかというふうに考えておりますので、是非よろしく願いいたします。

(江崎渉外担当主事)

ありがとうございました。

高橋校長、お願いします。

(高橋校長)

ありがとうございました。全く同感といいますか、大変貴重な助言をいただいたと思っております。

社長さんの意見を聞くというのは、なかなか私が奥手なのか、大企業のところに行って交渉してくるということをこの4年間できなかったのですが、一方で三重県内では、地域に鈴鹿高専の学生が就職してくれないという1つの声と、うちの学生もいろいろ聞く機会があれば大変有効である、効果的であるということで、三重県でものづくりバスツアーというのをやりました。最初は、どうも早稲田から学生を連れてきてやるとかいうから、それはおかしいじゃないかと言ったら、鈴鹿高専とか三重大学もということで参加させてくれました。三重県内の企業の社長さんと面談をして、さまざまな経験談を聞く機会です。帰ってきたら大変有意義であったということを聞きましたし、今、本校でも地域の中小企業の社長さんも来られて、先ほどの企業説明会のようなこともやり始めて、大変効果的であるということがわかってきましたので、今度は大企業にもお願いをしていきたいというふうに思います。

それから、女子力というのは全くそのとおりだと思っています。科学技術振興基本計画にありましたし、真っ先に女子中高生の理系進路選択支援事業に鈴鹿高専も手を挙げてやりました。機構のほうから言わせると、一生懸命やっている割には、女子の入学生が伸びないじゃないかと。いやいや、我々はそうではなくて、地域の中高生を相手にしたもっと広い視野で、志願者確保という狭い目的でやっているのではないんだと言っておりますけれども、確かに成果を上げなければいけないので、おっしゃられるようなこともやっていかなきゃいけないと思っております。

前の校長が一気に女子教員を4人採用したのです。これは後を継がなきゃいけないと

ということで、私の代でも積極的に採用するようにしておりまして、どうしてもそうなるとハードの面ということになります。学生に対する目配りというのが足りなかったと思うのですが、そういうようなことに配慮して少しできてきているのではないかと思います。個人的には、実習着というのがどうも暗いのですよね。女子学生にはもうちょっと明るいかわいいのを着てということをやったこともあります。まだ実現していません。そんな感じで、アメニティーも重要だと思っております。

(角田委員)

口コミでそういうのが、学生の口コミというのはかなりいろいろあると思うので、意外とそこは怖いなうちも思っておりますけれども。

(西岡学生主事)

現在、私、学生指導を担当していますが、最近、トイレを直しているのは、みんな女子のトイレばかりです。きれいになりました。逆に男子の更衣室が本校はありませんで、女子の更衣室は2つ用意しているという形で、女子学生の皆さんのためにということ、この10年余りはある程度そういうものを目的にしています。施設あるいは環境整備等については、校長が今おっしゃるとおりの目配りを、少々女子向きにしていかなければいけないと考えています。女子寮も構えております。寮務担当の主事もおりますので。

(井上寮務主事)

寮を担当しております井上といいます。

今、西岡学生主事がお伝えしましたように、学生寮におきましても女子寮が一番きれいです。留学生も現在15名おりますけれども、半分以上が女子ですので、留学生においても女子寮はきれいになっており、男子寮生のほうから苦情もあります。女子ばかりきれいにすると、「特別扱い・・・」等と言われております。学校のホームページにおいても寮の紹介をしていますが、これは全部男子寮ですね。

男子寮に比べて女子寮は非常にきれいになっております。これからは男子寮も改修等を行いきれいにしていかなければならないかなと考えております。

(江崎渉外担当主事)

ありがとうございました。

工学系の女子力が必要だということで、鈴鹿高専も積極的に女子学生を増やす努力をしていかななくてはならないということでございますけれども、やはり女子学生を増やそうと思いますと、供給元といいますか、鈴鹿高専の進学先として選んでいただく、中学校のほうの協力が恐らく必要になるのではないかと思います。中学校側の視点か

ら、鈴鹿高専に対する評価だとか要望、あるいは中学校に対して鈴鹿高専がいろいろ出前授業を実施するとか、教育の面で協力をさせていただいておりますけれども、そういった観点から、もっとこうしてほしいとかいうような御意見がございましたら、よろしければ熊谷先生、御指名して大変恐縮でございますけれども。

(熊谷委員)

私は、鈴鹿高専さんが国立でありながら鈴鹿というのを冠にいただいていること、非常に高く中学校のほうでも評価させていただいております。

先ほど、入学試験の状況、学力と入学の意思ということで、ある意味ちょっとダイレクトな情報をいただいたのですが、本校におきましては、やはり鈴鹿高専というところは高いブランド力を持っておりまして、最初、推薦の入試を受けた生徒というのは、もう絶対鈴鹿高専です。いわゆる県内の進学校に受験のお断りの届け出をついこの間持っていったぐらいでして、向こうの校長先生に、ではどこへ進まれるのですかと聞かれましたので、鈴鹿高専ですというふうにお答えをしてきたところです。入学を決定していただいた生徒や保護者の方に聞きましたら、まずその意思を強く持ったのは、入学説明会、それから高専祭でのこちらの対応が非常に温かかったということをおっしゃっていました。施設や設備やプログラミングの充実ということを上げている生徒もおりました。具体的に、将来環境について勉強したいとか、自然エネルギーについて社会に貢献できる人になっていきたいというような目的をはっきり持っている生徒が、やはりこちらを選んでいるということを強く感じました。保護者も、やはり技術や知識をしっかりとつけていただきたい、そして、その技術が国際社会の中で役立つものになってほしいということですか、それから地球の自然、生物、そういうものと共生できる知識や技術を持たせたい、これも保護者の強い意見というか要望でした。非常に大きな期待を持って、本日卒業式でしたけれども、こちらの学校に歩み出したと思っています。

本日、本校の卒業式で答辞を読んだのは女子生徒でしたけれども、こちらへの一番に入学を決めた者でして、揺らぎませんでした。できましたら、本校に高校の授業体験で先生方に来ていただいて、とってもいい授業をしていただいているのですが、そのときに女性の先生も来ていただくと、生きるモデルといいますか、身近なモデル、そういうつながりが持てるかなと思いますので、またぜひ来年度、高校授業体験には男性の先生も、女性の先生も来ていただけるとありがたく思っております。よろしく願いいたします。

(江崎渉外担当主事)

ありがとうございました、鈴鹿高専のほうから何かありますでしょうか。

(西岡学生主事)

個人的なことになりますが、熊谷先生とは指導課長の時代から中学校の皆さんへの高校授業体験という入学試験の関係で、お会いしたのが最初でした。本校は高専なので、高校・高専授業体験というふうに名前を変えていただけませんかという生意気なところからおつき合いをさせていただいています。熊谷先生におっしゃっていただいたように、生徒さんの将来を考えて、各中学校の進路担当の先生、もちろん担任の先生、あるいは教科の先生を始めとして、本校で自分の将来を実現させるためには、第1希望の学校であるという考えを持っていただいているということについては、大変ありがたいというふうに持っております。

ところで、偶然ですが、私の住まいが、熊谷先生の学校の校区です。平素から、本校で私も「あいさつ運動」の大切さを指導しています。たまたま、私たちのような住民が土曜、日曜に散歩をしておりますも、「こんにちは」というあいさつをしてくれたり、街にごみが落ちておりますと、自然と中学生の皆さんが拾ってもらっている、そういうような中学生の皆さんの姿を見ると、こういう人たちが確実に環境問題を真剣に考えてくれたり、また、将来、グローバルな国際的な人材として育っていくのだらうと思います。その状況の中で、その社会人基礎力を身につけてもらうために、本校での学生生活を希望してもらっているという実情は、大変うれしい限りです。これからも地域の学校、そして将来的には日本、世界を背負う学生の人材養成のために、私たちも中学校の先生の期待のそのものをしっかり受けとめて、日々の授業、学生指導に生かしていきたいというふうに思っております。今日は、本当に貴重なご意見をいただきありがとうございました。

(桑原副校長)

熊谷先生から女性教員を派遣してほしいということですが、大変ありがたいというか、いい御提案をいただきまして、ありがとうございました。ぜひ来年からそのようにさせていただきたいというふうに思います。

(熊谷委員)

よろしくお願いします。

(桑原副校長)

私の説明にもございましたが、広報というのは大変重要で、なかなか我々はそういうところにうまい手法を見つけることができませんので、何かいい御提案がございましたら、ぜひ参考にさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

本校の学生には、兄弟で来ている学生であるとか、あるいは御両親が本校の卒業生であるとか、そういうケースが非常にたくさんありまして、それはこの学校がよかった